英語学習における日本語の影響

—英作文を中心として—

丹　羽　義　信

1.1 外国語の学習に最近母国語の言語体系の影響が見直されてきた。言語が一種の社会習慣である以上，母国語は幼時より訓練された徹底した習慣である。習慣というものは，意志の自由を許さない機械的反射運動である。従って我々が母国語を話す時には，老若男女貧富はもとより，いかなる精神状態の場合でも，日本語の習慣に従っているのである。無意識の睡眠中の言語すら母国語の習慣に従っている。外国語を学習するという事は，母国語と異なった言語習慣を獲得する事である。二つの言語の言語習慣は，類似している部分もあり異なっている部分もある。いかなる人も母国語を持っているから，外国語の習慣には母国語の言語習慣を無視する事は不可能である。従って幼児が初めて，母国語を習得する場合と，既に母国語の習慣のあるものが外国語を学習する場合とは事情が全く異なっているわけである。又歴史や数学を習う場合と外国語習得の場合とは同様に事情が全く異なっている。言語学習に対する上のような考え方は，最近アメリカにおいていちじるしい発達を遂げた。アメリカでは母国語を異にする多種の外国人に効果的に英語を教育しなければならぬ実際的必要が生じたためであった。又一方 Bloomfield から始まって W. F. Twaddell, G. L. Trager, B. Bloch, C. C. Fries 等によって発展した行動主義言語学の当然の帰結でもあった。Linguistic Method を提唱し最近問題となっている Michigan 大学の Fries 教授は次のようにいっている。

It is not enough to have a descriptive analysis of only the language to be learned. The most efficient materials grow out of a scientific descriptive analysis of the language to be learned carefully compared with a parallel descriptive analysis of the native language of the learner. P. 36 Selected Articles from Language Learning. Michigan, 1953.

1.2 さて英語教育に当って，上の原理を適用すれば日本語の安定した言語習慣の上に英語の言語習慣を獲得する事である。日本語と英語の言語体系は非常に大きな相違がある事は周知の事実である。我々は子音の後に通常母音を伴う言語習慣を持っているゆえ，なかなか母音を除いて発音する事ができない。又 /l/ と /r/ の音韻的対立を持たぬ我々は永い年期を入れても発音できないのみか，聞きわける事すらできない。活用については3人称単数現在の動詞に -s をつける事や，名詞の複数の活用等は大きな相違である。又文章論においては，前置詞とテニオハの語順の相違や主語と動詞，目的語等との位置に根本的相違がある。主語に続いて動詞が来るという習慣は，我々動詞後置の習慣を持つた者にとって，きわめて獲得し難いものである。英語を聴取する時，我々が感ずる疲労はこの習慣によるところが多いと思われる。以上のように見てくると，多くの言語体系の相違が日本語と英語の間に存在する事に気がつく。

1.3 一方外国語の言語体系が母国語のそれと類似する場合もあって，その場合には学習がきわめて容易である。弱い破裂音に母音を伴うフランス語の学習が日本人に容易である事や支那人の英会話にすぐれている点等その例であろう。従って教育の場においても，母国語と類似の場合と，異なる場合とを十分考慮の上行う事は効果的であると思われる。英語学習における日本語の抵抗は，読む場合，書く場合，話す場合，聞く場合のいずれ

にも現われるであろうが，書く場合には調査が容易である。いわゆる英作文というのは日本語を英語に翻訳する事を意味している。従って，日本語の体系及び表現による影響が考えられる。それにつき簡単な調査の結果を以下に述べ，日本語の影響という要素をいかほど，又いかに，日本人のための英語教育に採り入れていくかという問題の参考としたいと思う。

2·1 調査は生徒の英作文テスト形式の答案の誤謬を資料とした。その主たる目的は，音声・単語・文章・記号の分類において誤の分布はどうであるか（できれば学年差まで知りたい）という問題と，これらの誤の原因のうち日本語の言語習慣によるものは一体どれほどあるか，又どんな具体的場合があるかという問題である。誤の種類は種々の分類が考えられるが，綴字・単語・文章・記号の四分類は，言語形態上から見ていちじるしい相違を示しているゆえ，これによった。又誤の原因は，日本語の表現，体系の影響と思われるもの，英語の他の形の類推に起因していると思われるもの，その他の原因に起因しているものとに分類して見た。テストは一学期中ごろ，中学Ⅰ．Ⅱ．Ⅲ．高校Ⅰ年について，既習部分より平易なものを選び，あらかじめ通知せずに行った。問題に対する難易感をできる限り一定にするためであった。

2·2 以上によって各学年の誤を一覧表に示せば次のようである。

中　1

種類／原因	a.	b.	c.	d.	計
1	?	10	10.7	4.4	25.1
2	?	0	0.4	19.9	20.3
3	27	0	24	3.6	54.6
計	27	10	35.1	27.9	100

但し
a　綴字　　b　記号　　c　単語（活用，単語）
d　文（語順等）
1．日本語の体系表現の影響によるもの。
2．他の形の類推によるもの。
3．その他の理由によるもの。
数字は誤の総数に対するそれぞれの百分率。

中　2

種類／原因	a.	b.	c.	d.	計
1	?	1.4	34	3.6	39
2	?	0	10	18	28
3	14.4	0	15.7	2.9	33
計	14.4	1.4	59.7	24.5	100

中　3

種類／原因	a.	b.	c.	d.	計
1	?	2.8	32	3.8	38.6
2	?	0	5.6	7.5	13.1
3	18	0	20.8	9.5	48.6
計	18	2.8	58.4	20.8	100

高 1

種類／原因	a.	b.	c.	d.	計
1	?	0	24	3.1	27.1
2	?	0	20	0	20
3	17.8	0	33.5	1.6	52.9
計	17.8	0	77.5	4.7	100

2·3 この結果について注意に値する点について考えて見る。

綴字の誤が中1，27%で他は14%～18%を示している事は英語は始めたばかりのため発音とつづりの関係が理解されていない事に起因しているであろう。こうした割合を示すのが，入門期の共通的傾向であろうか。綴字に？の記号のあるのは，1．2．3．の区別が困難であったためであって日本語の影響がない事を示すものではない。元来英語は文字と発音が結びついていないゆえ，日本語の発音が英語の文字に影響するところは比較的少ないと思われる。しかし，ローマ字を通して日本語の影響が若干見られ。たとえば，tablu，(table)，picuture (picture)，pictja (picture)。中1の誤は独特で英語の音韻結合の習慣にはずれたものが多い。pikcar, pikcra, picsir（いずれも picture）のごときである。それに対し他の学年は間違っていても英語の習慣をある程

度反映した間違が多い。

全体的に見て（高1を除く）ｃｄａｂの順に誤の割合が少なくなっている。b（記号）は種類が少ないゆえ，少ないのが当然であるが，cが圧倒的に多い事，又dがa（綴字）よりも多い事は注意を要する。問題の難易もあるから軽卒な結論は慎むべきであるが，d（文章）の誤は他に先がけて少なくすべきであろう。但し高1は4.7％といちじるしく少なくなっている。

b（記号）について。これには？！．，等の記号の外 Capital Letter の使い方が含められている。中1が圧倒的に多いのは，Spelling の場合と同様で英語を始めたばかりで日本語にない記号であるからであろう。

c（単語）について。cは各学年共最も高い割合を示している。この部分が学習の範囲が一番広いと共に，言語構造から見ても複雑な部分であるからであろう。中1が最も少なく35.1％で，他は急に増加し58％～77％の間にある。これは一年に比し教材の範囲が二年から急にひろがって行くからであろう。

3.1 次に調査の主要目的である日本語の抵抗について見る事とする。

原因＼種類	a.	b.	c.	d.	計
中 1	?	10	10.7	4.4	25.1
中 2	?	1.4	34	3.6	39
中 3	?	2.8	32	3.8	38.6
高 1	?	0	24	3.1	27.1

日本語の影響と思われる英作文誤の分布

註 数字は誤の総数に対する％を示す。
a. spelling　b. mark　c. word　d. sentence

一度のテストによるこれらの数字はごく概略的傾向を示しているにすぎない。各クラスは成績水準においても，入試その他の理由によって多少異なっている。しかし，日本語の抵抗が，25％～38％もあるという事は注意すべきである。aの段階や間接的のものを加えれば，％はずっと高くなると思われる。文の段階における抵抗度が高1においてすら同一の割合である事は，相当語学が進んでからも，不明な問題に会うと日本語の習慣が出て来る事を示している。なお高1は完全選抜テストにより選ばれた組で，英語教育が最も進んでいると見なしてさしつかえない。

3.2 次に日本語の影響と考えられる誤の具体的場合を列挙して見る事とする。

（数字は頻度を示す）

Kind ＼ grade	punctuation mark	word	sentence
中 1	,を落す（日本語ではない場所において） 4 小文字で文を始めた。 13 ？を落した。 8	no, を落した。（日本語に「いゝえ」がなかった」 2 in my hand の my を落した。（日本語は使用せず） 11 a, the を落した。 14	主語を落した。（日本文には不必要だつた） 5 文全体を日本語の語順に従って書いた。 6
中 2	？を落した。 2	a, the を落した。 25 here を of here とした。 1 mine を of mine とした。 2 on を of on とした。 3 mine を is mine とした。 9 in my hand の my を落した。 2 haveをhave areとした。（持っているの影響か） 3 plural の活用を落した。 2	capital of Japan をJapan of capital とした。 2 文全体を邦語の語順に従って書いた。 2 have を使うべきところを邦語に従って，there are とした。 1
中 3	？を落した。 2 小文字で始めた。 1	plural の活用を落した 6 of on とした。 4 are red を red とした。 5 a, the を落した。 10 三単現在動詞の -s を落した。 7 in the east を from the east とした。 2	「机の上には本がある」において，on the desk を主語とした。 4
高 1		the, a を落した 。 25 in the east を from the east とした。 5	「今日そこへ行く」において，this morningを主語とした。 4

4. 結　　論

実態調査の結果1）英作文の場合，少なく見積って，30%以上の誤が日本語の影響を受けている事（これには，音韻の誤や，間接的の誤が含まれていないから，それらを加えたらずっと増加すると考えられる。）2）日本語の影響による誤の種類としては word の段階では，冠詞に関するもの，前置詞に関するものが多く，sentence の段階では語順に関する誤が大部分であった事，3）学年別に見る時は日本語の影響は中2，中3が40%弱できわめて多く，それに対して，中1，高1が25%強でずっと少なくなっている事がわかった。中1は教材が少なく，pattern 回数が少ないため，暗誦しているためで，高1は一応基礎を身につけて，英作文のような時間的余裕の十分ある場合には日本語にあまり影響されないのであろうか。又先述した各クラスの能力が異なる事も考慮されねばならぬ。いずれにしても中2，中3は教材の急激なひろがりと，英語学習の年月が少ない点からいって最も影響が多い事は十分考えられる。

次に考える事は，いかにして，こうした結果を効果的教育に実践して行くかという事である。音韻（音声）の教育の場合は英語と日本語とに多くの類似点があるから比較的容易に相違点のみ強調して教育できるが，syntax の相違点は複雑で，これを Curriculum に組入れるには幾多の問題があるけれど，こうして出た具体的誤を特に強調し，時には母国語にも言及して教育する事は効果的であると思われる。又母国語の影響は speedy な speaking 及び hearing に最も多く，忠実に現われると考えられるゆえ，この面の実態調査が必要と思われる。今回は色々な都合で英作文をとりあげたが，この方面に何等かの啓もう的意味があれば目的は達したものと思う。